

控物捕次平形銭

薬霊の不死

堂胡村野

庫文空青

一

「親分、どうなすつたんで？」

ガラツ八の八五郎は、いきなり銭形平次の寝ている枕許に膝行り寄りました。

「八か、——風邪を引いたんだよ。寝ているのも馬鹿馬鹿しいが、熱が高くて我慢にも起きちゃいらねえ」

平次は手拭で額を縛って、真つ赤な顔をしてフウフウ言っているのです。

「そいつはいけねえ、悪い風邪が流行るんですってね、気をつけなくちゃいけませんよ」

ガラツ八は世間並の事を言いながら、平次の額へそと触ってみるのです。

「寝込むほど患ったのは、六つの時麻疹をやってから、ツイぞ覚えのねえ事さ。鬼のかくらんだよ」

「岡つ引の風邪でしょう」

「ふぎけちやいけねえ、病人をからかったりなんかしやがって」

相当苦しそうな平次は、ツイ八五郎の軽口に応酬して、ポンポン言ってみたりするので

す。

「からかっているわけじゃねえが、親分が患った日にや、御府内は闇だ」

「お世辞なんか言いやがって、馬鹿野郎ッ」

「へッ、お出でなすつたね、その威勢のいい馬鹿野郎が聞きたかつたんだ」

ガラツ八は掌てのひらで、自分の額を一つポンと叩くのでした。

「呆あきれた野郎だ、見舞に来たんだか、遊びに来たんだか、わかつたものじゃねえ」

「見舞ですよ、正真正銘親分の見舞ちげに違ちがえねえ証拠は、この通り手土産てみやげを持って来たじゃありませんか」

「大層な口上だな、——塩煎餅せんべいの袋でも持って来たんだろう、どうせ」

平次は病人らしくもない元気で、続けざまに八五郎をからかっております。

「どうせ——は情けねえ、見て下さいよ、梅寿堂ばいじゆうどうの上菓子が一と折なだ、灘なだの生一本きいっぽんが五升

「上菓子は解っているが、病氣見舞に酒を持って来る奴もねえものだ」

「こいつを卯酒にして飲むと、大概の風邪は一ぺんにケシ飛びますよ。もつとも、親分がイヤなら、あつしが飲みながら、一と晩ぐらいは看病してやってもいい」

「呆れた野郎だ」

平次が精一杯呆れ返って、八五郎の馬鹿馬鹿しさも市が栄えたわけですが、何かしら、平次の見当では、割り切れないものがそこに残っているのです。

「変な顔をするじやありませんか、親分」

ガラツ八は狭い^{あわせ}裕の前を合せて、平次のげんんな視線の前にモジモジしました。

「上菓子一と折に、劍菱^{けんびし}が五升——少し奢^{おご}りが過ぎるようだぜ。八、どこからそんな工面をして来たんだ」

「工面なんかしませんよ」

「手前^{てまえ}にしちや大した散財じやないか。岡つ引が金を持っているなんざ、褒めたことじやねえ、どこからそんな金を持って来たんだよ、八」

正直者の八五郎のために、平次はそんな事まで真剣に心配してやるのでした。

「どこだつていいじやありませんか」

「よかアないよ、まさか筋の悪い金を身につける八とは思わねえが、あとで困るほどの工面をさしちや、菓子も酒も喉^{のど}を通らねえ、白状してしまいな」

平次の調子がシンミリしてくると、ガラツ八はツイ涙ぐましい心持になるのです。

「そんな金じゃありませんよ、親分、向柳原の叔母が、——天靈様の御本山にお詣りをするついでに、西国をひと廻りして来るから、二度と江戸へ帰るか帰らないか判らない。長年溜めた少しばかりの金は、みんな天靈様に納めるが、これは、たった一人の甥への形見だから、心持よく取つてくれと、器用にくれたのが五両、親分の前だが、五両と纏まった金を持ったのは、生れて始めてで——」

「それは本当か、八」

話半分に聞いて、病人の平次はガバと床の上にハネ起きました。

「あれ、お前さん、そんな事をしちや、風邪が悪くなるじゃありませんか」

女房のお静は、お勝手から驚いて飛んで来ると、平次の身体を無理に床の中に押込むのでした。

「本当も嘘もありやしません。費い残りがまだ四両と少し、こいつで何をしようかと、昨日から考えているところで」

「八、そいつは棄てておけないぜ」

「へエ——」

「手前のためにはたった一人の叔母さんだ、間違いがなきやいいが——」

「へエ——」

八五郎の無関心さ。

二

その頃、江戸中の評判は、東西国の元町に、祈禱所きとうじよを設けている、天靈様という流はやり行神がみで、誠心まごころこめて禱りいのさえすればいかなる難病も平癒疑いなく、富貴榮達も、心のままと言ひ触らされました。

ツイ一年ばかり前に開いた、ささやかな祈禱所ですが、信心の善男善女絶間もなく、五両以上の喜捨をした者には、奥殿の参籠さんろうを許して、この世ながらの極楽浄土を拝ませるという噂うわさ。その極楽浄土の素晴らしさは、嚴重に口止めされているにも拘かかわらず、実見した人の口から伝わって、江戸中誰知らぬ者もない、大魅力だったのです。

極楽浄土は、金さえ積みめばどんな凡夫にも手軽に拝まれました。そのうえ持っている身し上しやうを根こそぎ捧げる篤信家とくしんかは、九州にあるという天靈様の本山を拝ませた上、そのまま、極楽安樂国に大往生を遂げさしてやるというのでした。

一番先に飛付いたのは、この世の快樂に見切りをつけた人達——鰥寡孤独——でした。夫に死に別れた女房、子供に先立たれた老母、身上や健康や、希望を喪つた若者など、金があつて希望のない人は、蜜に集まる蟻のように、元町の祈禱所に集まって来たのです。

それは、谷中に蓮華往生のあつた少し前のこと、疑うことを知らない江戸の人達は、さやかな天靈様の祈禱所を、瞬く間に三倍五倍に拡張させ、疑懼と好奇まで手伝つて、天靈様を素晴らしい魅力に拵え上げてしまつたのでした。

「そいつは大変なことになつたかも知れないよ、八」

「何が大変なんで、親分？」

八五郎の善良な心には、平次の恐怖がどうしても呑込めません。

「叔母さんが、天靈様にこつたのは、近頃のことかい」

「二た月ばかり前からですよ」

「どうかすると、二度と帰らないかも知れない」

「親分、心細いことを言つちやいけません」

ガラツ八もすっかり脅かされてしまいました。

「叔母さんの臍くりはどれほどあつたか、手前にや解るまいな」

「解っていますよ、目星めぼしいものを売ったりなんかして、掻き集めた金は十五両」

「フーム」

「まだ家作が二三軒、貸しが二三十両あるはずだが、そいつは急には集まらねえ。旅へ出る前に、十五六両掻き集めたのがせいぜいでしたよ」

「よくそんなに持っていたんだね、——身しんしょう上じやうをみんな持出した人でなきや、命には間違まちがいがないかも知れねえ」

平次は枕から頭をあげたまま、熱っぽい額を押えて何やら考えております。

「そんなに心配なことがあるんですか、親分」

と八五郎。

「叔母さんの命にかかわるほどの心配事だよ、——が、今となつては手のつけようはない。

天靈様は一度洗つてみようと思つていたが、肝腎のとき風邪を引いちゃ何にもならねえ」

平次はいかにも口惜くやくしそうです。

「あつしじゃいけませんか、親分」

「何？」

「あつしが乗込んで行つて、叔母さんがまだ居るんなら伴つれて来るし、居なかつたら、世

間の言うように善い事よをしているか、それとも親分の考えるように、何か悪事を企んでいるか、底の底まで洗ってみようじやありませんか」

ガラツ八は日頃にもない意気込みです。叔母の先途せんとを見届けてもし難儀をしているなら、救い出してやろうといった気になったのでしよう。

「その四両の金は捨てなきゃならないよ、八」

「へエ——」

「ここに一両ある。手前の四両と併せて五両だ。東両国へ行つて、極楽とやらを見せて貰つて来るがいい」

「勿もったい体ないじやありませんか」

四両あれば——の目算が外れて、ガラツ八は少し憂鬱うゑふでした。

「ケチな事を言うな、どうせ手前の働いた金じやあるめえ、それんばかりの元金もとで叔母さんを助けられりや本望だろう」

「よく解りました。じゃちよいと行つて来ますよ、親分」

ガラツ八はもう立上がつて、懐へ十手と手拭と財布をねじ込むのです。

「待ちな、八」

「へエ——」

「今度は俺を当てにしちやならねえよ、二日や三日じゃ、この風邪は癒なりそうもねえ」

「そう心細いことを言わずに、親分」

「まあ、聞け、——それから、十手捕縄は持って行つちやならねえ、岡つ引と知れちや打ぶちこわしだ、——向うじゃ、手前の顔を知っているかも知れないよ」

「大丈夫ですよ、親分、祈祷所の出来たのは、ツイこの間のことだ、それに東両国は縄張じやないから、滅多にこのあつしも面めんを持つて行かなかつたのが、今となつては強味だ」

「間違つても十手風を吹かせるな、いいか、こつちから名乗りさえしなきゃ、手前を岡つ引と思うようなあわて者はねえ」

「へッ、——岡つ引とは間違えねえが、その代り歌舞伎役者と間違える」

この期に臨んでも、ガラツ八は無駄を言っております。

「それから刃物を身につけて行つちやならねえ、あいくちヒ首などはもつ以ての外だよ」

「そんな物騒なものなんか持つちやいませんよ、腕と智恵だけありや沢山で——」

「馬鹿野郎」

八五郎は熱っぽい平次の眼に送られて、不思議な冒険の舞台に登りました。

三

ガラツ八は堅気の職人になりすまして、東両国の天靈様に乗込みました。

神田では顔の通った八五郎ですが、橋一つ越すと縄張違いで、さすがに長い顔ながもあまり通用せず、それに、持つて生れた間延びのした造作が役に立って、近頃開いた祈祷所の者などは、滅多なことでこれを岡つ引と見破るはずありません。

どうかしたら、岡つ引と知っているくせに、甘く見て玄関の関所を通したのかもわかりません。下手に木戸を突いて、疑いの種を蒔まくよりは、岡つ引でも手先でも無差別に包容して、信心の力で懐柔する方が賢いと思つたのかも知れなかつたのです。

ともかくガラツ八は、何の支障もなく祈祷所に通されました。元は見る影もない長屋だったそうで、その後幾度か取拡げたり改築したりしましたが、江戸中の流行神にしては思いの外の手狭な造りで、その拝殿も、充分荘厳ではあるが、しかし、決して度を過して華美なものではありません。

「お賽さいせん錢や奉納は大変なものだそうですが、先せん達様がよく出来た方で、貧乏人に施し

をするから、祈祷所もこれで結構だというふうですよ」

溜りの大火鉢を囲んで信心の一人らしい中年男がそう言うのを、八五郎は鼻の穴を掘りながら聞いておりました。

「暮し向きだつて、それはそれはお気の毒なくらい粗末ですよ、貧乏人の私もだつてあんなことはありません。雑穀飯に一汁一菜で、どうかすると塩を嘗めながら召し上がつていらつしやいます」

かなぼうひき
金棒 曳らしい女が、鼻をすすりました。

「へエ——、誰がそれを見たんぞ？」

八五郎は一本横槍を入れます。

「お勝手もお居間も見通しですよ、嘘だと思つたら、祈祷所の裏を覗いて御覧なさい」
女は少し不機嫌な様子で、紫の幕を絞つた祈祷所の裏を指さしました。

八五郎はフト立上がつて、祈祷所の後ろを覗くと、奥も底もないお勝手と居間があるだけ、粗末な調度の中に、二三人の若い娘が、夕食の仕度らしく身軽に立ち働いております。やがて、祈祷所の先達と言われる四十男が出て来ました。九郎次くろうじというのが俗名で、仏学も儒道も一と通りは修めたうえ一夜豁然かつぜんたいご大悟して、天靈道を開いたという人物、総髪

に一種異様な法服を着け、手には中啓を持っていましたが、態度が思いの外気さくで、流
行神に付きものの虚仮おどかしな尤もらしさはありません。

お神樂堂へ出て来るような、緋の袴の少女が四人、灯明と供物を持って入って来まし
た。四人ともどうして選り抜いたか、採りたての果物のような新鮮な娘で、そのうちの一人、すらりと背の高いのは、桃色真珠のような皮膚と、漆を点じたような瞳を持った少女が、八五郎の注意をグイと掴みました。

こんな清らかな娘が、楽しそうにいそいそと働いているところに、不正も暴悪もあろうはずはないと思わせたのです。

「皆の衆、今日は新しい方も多勢見えられたようだ、格別天靈様の御加護があるように、御祈祷申上げよう。ズイと前へ進みなされ」

二三十人の男女を青畳の上に坐らせて、さて静かな祈祷が始まりました。

神体は、供物と花に隠れて見えませんが、七壇の白木の台には、十六の灯が煌々と照り渡って、縁から射し込む美しい夕陽と対照し、甘美な香煙がゆらゆらとこめる中に、九郎次先達の祈祷が始まるのです。

それは八五郎が今まで聞いた、どんな経文よりも快適な響を持ったものでした。祈祷の

続くうち、どこからともなく緩やかな楽の音が響いて、若い女の和讃が、静かに静かに聞えて来るのでした。

音楽も和讃も、かつて八五郎が聞いたことのあるような種類のものではありません。笛や三味線や太鼓といった、浮かれ調子のアルコールの匂いのするものでないばかりでなく、どうかしたら、八五郎などは、その楽器さえ見たことがなかったでしょう。若い女の顔も、御詠歌や御和讃とは、およそ見当の違つたものです。

しかし、美しい夕陽と十六の灯明と、甘美な香の煙と、素朴な祈りと、静かな音楽は、しはんとき四半刻（三十分）経たないうちに、多勢の人の心をすっかり捉とらえてしまいました。信心事とは縁のない八五郎でさえ、極楽浄土とやらいうところへ行く近道は、なんかこんな長屋の奥にあるような気がしてならなかったのです。

一とわたり祈祷がすむと、先達の女房でお方まんという四十女が、黒ずくめの品の良い様子で、緋ひの袴はかまの少女に案内させて出て来ました。

「この上夜のお勤めに加わる方はありませんか。齋とぎの料は五両ですが、それがみんな、お困りの方の救い米になります。その功德によって、一夜安楽浄土の姿がまざまざと見られます」

お万女はそう言つて、多勢の信者を一とわたり眺めるのでした。その時はもうすっかり暮れて、祭壇上の十六の灯だけが、明々と神秘の光を投げかけております。

お万の声に応じて、二人の希望者が申出ました。それに続いて、
「あつしもお願い申します」

ガラツ八も、つい、役目を忘れてこう言いたい心持になります。

夜の齋に加わる人達は、緋の袴の少女に案内されて、祈祷所の後ろの、ささやかな家に案内されました。恐ろしく簡素な部屋が幾つかあつて、それに通される信者は、もう一度齋戒をすませ、いちいち先達の祝福を受けて黄金の杯に靈酒を一杯ずつ受けるのでした。

「これが、仙家の不死の靈薬でござるよ。この一杯の靈酒を服すると、諸々の罪障を解脱し、我等の魂は、汚い血肉を捨てて、生きながら浄土の法悦を享ける。この靈酒を毎日毎夜服する者は、不老不死の歎びを受けることは疑いもない。そのためには、天靈様に一身をささげ、五慾を捨てて、清浄な身にならなければならぬ」

九郎次はそんな事を言いながら、一杯の靈酒を一人一人に勧めるのです。

ガラツ八は何の躊躇もなく靈酒の杯を傾けました。油のような酒ですが、異様な香氣があつて、そんなにますぐはありません。

どこからともなく、また楽の音が湧いて、教えられた呪文をくり返しくり返し称えていくうちに、大地の底へ引込まれるような、恐ろしい眠気が催します。ガラツ八は任せ切った心持でその不可抗な眠気に身を委ねました。

四

「驚いたの何のつて、親分」

ガラツ八はここまで話して妙に擦つたい思い出し笑いをしました。

「それからどうした、八」

平次はこの話のうちから、何かしら、重大なものと、不思議な圧迫を感じていたのです。
 「何なんどき刻経ったか知れねえが、眼を覚してみると——親分の前だが、あれが本当の極楽というものかも知れませんよ」

「夢でも見たのかい」

「夢じゃありませんよ、抓りつねや痛いし、食った物は腹にたまっている」

ガラツ八はその歓楽境を不器用な舌で語るのです。

ほう 方何町とも知れぬ広大な屋敷内、大きな泉水があつて、船が泛んで、その船の中に、結構な女が五六人、一人は歌い、一人は踊り、三人は鳴物を受持ち、そして一番年増がガラツ八に膝枕を貸していたというのです。

歓楽の中に眼を覚したガラツ八は、朱塗の欄干をめぐらした廻廊に船をつけさせ、女達の手車で二階の座敷の上に導かれました。そこに並んだのは、美酒と佳肴と数十基とも知れぬ銀燭と、そして、十二三から二十五六までの一粒選りの美女が二十人ばかり。

「そいつは皆んな江戸言葉かい」

「里言葉を使わないのが不思議なくらいでしたよ、身扮は町人風武家風、いろいろあるが、間違いもなく日本人で——」

「何を言やがる」

ガラツ八の説明を聞いただけでも、その歓楽が並大抵のものではありません。

「そのうちに夜が更けて、酒にも馳走にも飽き、思わず横になると、小女の一人が水を一杯持つて来てくれた。ギヤマンに入れた何とも言えねえ匂いの飲物でしたよ、一と口に飲むと、またウトウトと眠ってしまったと思うと——」

「それからどうした」

「元の東両国の祈禱所で眼が覚めましたよ」

「時刻は？」

「朝陽が障子へカンカン当たっていましたよ。あつしはあわてて飛起きると、真つ直ぐにここへ飛んで来ましたが、緋の袴をはいた女の子が二三人、ケロリとして祈禱所の中を掃除していた様子でした」

「フーム」

「親分の前だが、あんな結構なお宗旨はありませんよ。もう一度行きてえが、さて五両の工面がつかねえ」

「とにかく、祈禱所へだけは、当分顔を出すがいい。五両の工面が付いたら、もう一度ぐらいは面白い夢を見さしてやるよ」

平次はそんな事を言いながら、深々と考えているのです。

「それから何をやらかshやいいんで——」

とガラツ八。

「石原いしはらの兄哥あにぎのところの、お品しなさんに、済まねえがちよいとここへ来て下さるようになってそう言ってくれ」

「へエ——」

ガラツ八は魂の抜けた人間みたいに、フラフラと本所へ行つてしまいました。

それから二た刻あまり、石原の利助りすけの娘——女御用聞と言われるお品が顔を出したのは、もう昼過ぎでした。父親の利助が、中風で寝込んでしまつてから、多勢の子分どもを指図して、お上の御用を立派に勤め、出戻りながら美しい年増としぞうばかりを惜し気もなく朽ちさしているお品です。

「親分、風邪を引きなすつたんですつてね、いけませんねエ」

お品はお静に案内されて、慎み深く平次の枕許に通りました。

「お品さん、濟まなかつたね、わざわざ呼んだりして」

「とんでもない、親分」

「実はね、大変なことがあるんだが——」

平次は言葉少なに、ガラツ八の経験を物語りながら続けました。

「この話を聞いて何か変な気はしないかね、お品さん、近頃はあの天霊様の信心の者が、ちよゆくえいちよゆくえい行方知れずになるといふが——」

「それですよ、親分、私も目をつけていますが、家捜ししても先達の跡をつけても、怪し

「いことは一つもありません。手のつけようがないんです」

「祈祷所というのは、大変狭いんだそうだね」

「長屋を二軒つぶしただけのことで、あの中には池も船もありやしません」

「夜になってから人の出入りはないだろうか」

「不思議に早寝の早起きで、戌刻（八時）過ぎは戸をしめてしまします」

「フーム」

「八五郎さんが本当にそんな大きな家へ行つたんでしようか」

お品の聡明な眼が瞬きます。

「満更夢でもないらしいよ」

「どこから手をつけたものでしょう、親分」

「近所を一軒一軒虱潰しに捜すんだね、外に術はない」

「家の者は先達の九郎次夫婦を縛ってみようか——つて口惜しがりますが、証拠のないものを縛るわけにも行きません」

「ともかく、下つ引を十人も駆り出して、東両国一パイに網を張ってみるがいい、夜中と
 暁方あけがたに通つたものは、犬つころ一匹逃さないようにするんだ」

風邪の床にいながら、平次の作戦は水も漏らしません。

五

その晩、お品は利助の子分と下つ引を総動員して、東両国一パイに網を張りました。戌い刻つ過ぎに通る者は、按摩あんまも夜泣き蕎麦そばも、犬つころ一匹も逃さない嚴重さでしたが、祈祷所から出た者も祈祷所へ入った者も一人もなく、極めて平穩な春の夜は、うらうらと明けましたのです。

翌日は、元町一帯一軒残らず家捜しをしましたが、これも何の変哲もありません。

三日目の晩、思案に余つて東両国へ出かけたお品、一軒一軒用事を拵こしらえて当っているうち、どこの家でどう押えられたか、翌る朝になつても、姿を見せなかつたのです。

ガラツ八の叔母もガラツ八自身も、それつきり姿を見せず、お品も行方知れずになつて、平次は床の上で焼き付けられるような焦躁とらに囚とらえられました。

平次の熱は相変らず高く、町内の本道（内科医）は、この風邪は性質たちが悪いから、当分外へ出ては命に拘わるといふ脅かしようです。

「お静、石原の兄哥のところへ行つて聞いて来い、一昨日から誰も来ないのは唯事じやあるまい」

平次は氣ばかり揉みます。

が、その時ちようど、石原の利助の子分が、この間からの報告を纏めて持つて来てくれました。

「親分、八五郎兄哥は相變らず祈祷所に入り浸りですよ。八五郎兄哥の素姓が判つちや何にもならないから、顔を合せても口をきかないようにしていますがね」
妙に奥歯に物の挟まった言いようです。

「お品さんは？」

「どこへ行つたか、まるつきり見当が付きません」

「あの辺は日が暮れてから通る者はないのかえ」

「ろくな犬も通りません、医者げんどうの玄道の外には」

「医者げんどうの玄道？」

「え、祈祷所とちようど背中合せて、川岸かしつぷちの家ですよ」

「祈祷所に近いのかい」

「背中合せといつても、町の向うとこつちだから、その間に家が五六軒あるでしょうよ」
「フーム」

平次は考え込みましたが、取止めたことは一つもありません。

石原の子分が帰ると、平次はお静を呼びました。

「お静」

「ハイ」

「こいつを抛ほつておくと、八とお品さんの命が危ない、——俺の言うことを黙って聞くだろうな」

「……………」

恐ろしい不安に怯おびえて、お静は夫のやつれた顔を見つめました。

「この平次は大病人だ、外へ出る気遣えはねえ」

「……………」

「そう世間で思っているのに、——八の野郎が両国へ行つてから、変な野郎がこの路地の外をウロウロしてるようだ」

「……………」

「俺は病人だ、そのうえ見張られている。——いいか、お静、お前は俺の代りに、東両国へ行つて、一と晩見張っているんだ」

「私が？」

「いやだとは言わないだろうな」

「ハイ」

外はもう真つ暗でした。

「ここには婆さんがいる、俺のことは心配せずに行くがいい」

「……………」

お静の遠縁の婆さんが一人、この間から来て手伝つていたのでした。それから半刻はんとぎばかりの後、春の夜風の薄寒さを、お高祖頭巾こそずきんにしの凌いで、お静はたった一人路地の外へ出て行きました。いつもの縞しまのあわせ袷あわせ、素足に草履、若さと軽けいしよう捷しやうさは申分もありませんが、闇なまめに匂う艶なまめかしさは、さすがに痛々しい姿でした。

真つ暗な川岸かし伝いに両国へ若い女の夜道は楽ではありませんが、お静は側目わきめもふらずに急ぎます。後ろからそれを追う男が一人、即つかず離れずに来るのを、お静は知ってか知らずか別に気にとめる様子もありません。

六

ガラツ八の八五郎は、近頃はもう、すっかり夢中でした。天靈様に入り浸って、二度と平次のところへ帰る気さえなくなったのでしよう。時々は祈祷所に泊り込んで、掃除をしたり、取次に出たりしております。

緋ひの袴はかまをはいた、四人の少女のうち、一番可愛らしいのはお薦つたといつて十八、先せん達だつ九郎次の姪めいとわかりましたが、人目が多いので、うかうかガラツ八の相手になって、話などをしてはおりません。

が、この少女の美しい眼から、ガラツ八は何かしら訴えるようなものを感じました。何を一体言おうとするのでしょうか。

ある日の朝、小さい庭の掃除をしていると、

「おや？」

沓くつ脱ぬぎの側の砂の上に、まざまざと文字が書いてあるのです。

——ここほれ、ワンワン——

お伽草紙とぎぞうしの花咲爺の文句を、ガラツ八はしばらく見詰めておりました。が、箒ほうきの柄を返してそつと掘ると、土の中から出て来たのは、山吹色の小判が一枚、二枚、三枚、——数もちょうど五枚、燦然さんぜんとしてガラツ八の掌てのひらに光ります。

その五両を投出して、その晩ときの齋ときに、ガラツ八が加わったことは言うまでもありません。祈祷や和讃が済んで、裏の部屋へ行くとき、お蔭はそつとガラツ八の手に紙片を握らせました。開いてみると、

——お願いだから逃げて下さい——

とたつたこれだけ、顔をあげると、お蔭の美しい眼が、どこかで訴えているのを、ガラツ八は意識しました。

が、あの池と船と、美女と、酒宴の誘惑は、ガラツ八を押し倒してしまつたのでしよう。紙片を小さく丸めて、ポンと口の中へ抛ほうり込むと、何事もなかつたように、不死の靈酒の筵むしろに坐ります。

先達夫婦や少女達がいろいろの儀式を済ませると、黄金こがねの杯が出ました。不死の靈酒を一杯ずつ、なみなみと注いでくれます。

「おや？」

庭のあたりで、何やら大きな物音がしました。誰か往来から、石でも抛つたのでしようが、それもほんの一度だけで、夜は水のごとく静まり返ると、ガラツ八はコクリコクリと居いねむ睡りを始めました。

やがて、死んだ魚のようにガラツ八は、畳の上に眠りこけてしまったのです。

「もういいよ」

「よし来た」

二人の男が、ガラツ八を担ぎあげました。

「こいつは岡っ引だそうじゃないか」

「シツ」

「どうせ聞える気遣いはないよ、腐まぐろった鮪のようなものだ」

そんな事を言いながら、土間伝いに次の家へ、長屋のお勝手から次の家へ、またその次の家へ、——五六軒の家を黙って抜けると、祈祷所の反対側に門戸を張っている、医者のの玄道の家になるの家になるのです。

家から家と伝わって、町一つ通り抜けようとは、錢形平次の考えも及ばなかつたでしょう。

「駕籠は？」

「用意が出来ているよ、抛り込みさえすりやいいよ」

「心得た」

物馴れた調子で、眠りこけたガラツ八を受取った男は、入口の土間に据えた、乗物の中にそっと入れました。

「それよ」

「合点」

垂たれをおろすと、中には医者いしやの玄道げんどうが乗っていることになるのです。石原の利助の子分が、五六人網を張っている中を、駕籠は掛声もなく、向島の方へ飛びます。

落着いた先は小梅の大きな寮、隅田川から水を引いた池の上には、見事な遊山船を浮べて、春宵しゅんしょう一刻を惜しむの長夜の宴を、昨日も今日も開いているのでした。

名義は日本橋の呉服太物問屋ごふくふともものどんや、大川屋甚兵衛おおかわやじんべえの寮、下女、女中、お小間使まで二十八人、その大部分は川一つ隔てた里の豪勢にも劣らぬ装いを凝らして、夜ごとに代る夢心地の客を迎えるのです。

ガラツ八はここへ来ると、眼が覚めるのでした。いや、実は先刻から眼が覚めていたの

です。いろいろ工夫を凝らした挙句不老不死の靈酒というのを、懐中ふとこの手拭に吞ませて、恥も外聞もなく眠りこけた振りをしているのでした。

「それ、お客様お目覚め」

立ち騒ぐ女達、船が廻廊の下に着いて、座敷の中に追い入れられると、ガラツ八は予かねて見定めた廊下の闇へ、ツイと身を隠してしまったのです。

七

「おや、お客様は？」

「たぶん御手洗おちようずでしょう」

「随分長いわねエ」

そんな噂をしている女達の声を聞いて、ガラツ八は物の蔭を拾いながら、奥へ奥へと入つて行きました。

大方の見当はつきませんが、ともすれば人に姿を見られそうで、なかなか思うような活動は出来ません。

さんざん迷った挙句、フト飛込んだのは、真つ暗な二階の納戸でした。左手から射して来るのは、唐紙からかみの隙間すきまをもれる細い細い光線あかり、——そつと手をかけて唐紙を開けると、

「おや？」

年を老とった女が一人、淋しそうにお仕事をしておりませんが、ガラツ八の眼には、咄嗟とつせの間にその素性が判りました。

「まア、八五郎」

「シツ、黙つて、叔母さん」

八五郎は叔母さんの口を塞ふさぎたい心持でした。

「何だつてこんな所へ来たんだい、早く帰つておくれ。私はおとなしくしているからいいが、お前の素姓が判ると命がないよ——」

「叔母さんを救い出しに来たんですよ、さア、早く、早く」

「だつてお前、逃げる工夫なんかないよ」

「どんな事をしたつて、叔母さんを助け出しますよ、さア」

八五郎は叔母の手を引くと、行灯あんどんを吹き消して、そつと部屋の外へ滑り出しました。

折柄、座敷の方では、わめき立てる女どもの声々。

「お客様は居ませんよ」

「岡っ引が逃出しましたよ」

二十幾人のソプラノとアルトが、夜の空気を揺るがして諸方に響き渡ります。

「八五郎」

「叔母さん、大丈夫だ」

がしかし、四方の門は嚴重に締つて上、廊下も池も、部屋部屋も、溢れるような光の氾濫で、身を隠す限などがあるうとは思われません。

「叔母さん、この中へ入つて下さい」

裏口に置いたのは、先刻ガラツ八が送られた駕籠。

「お前は？」

「私はどんな事でもしますよ」

危ぶむ叔母を駕籠の中に押込むと、ガラツ八はいきなり縁の下に潜り込みました。

一方は、その晩も神田の平次の家から出て来た、お高祖頭巾のお静。

両国橋の上へ来ると、後ろから、やくざ者らしい男に声をかけられました。

「ちよいと、待つて貰おうかい、お神さん」

「……………」

小刻みな駆け足になると、前から一人。

「どっこい、こつちにも関所があるよ」

前後から、ヒタヒタと寄せて、後ろの男の手が、お静の襟えりに掛りました。

「待てと言ったら、待つものだよ」

グイと引戻す手に従って、お静の身体はドンと後ろへ——ハッと立直るところを、肩の上の曲くせもの者の手を取って、捻ひねり加減に一本背負。

「わッ」

前の男の頭の上へ、後ろの男が叩き付けられたのです。

お静は橋の上へへた張る二人の曲者に目もくれず、東両国の医者、玄道の家の前まで来ました。戸口に据えてあるはずの駕籠がないのを見ると、サツと向島に飛びました。

予かねて見定めておいたものか、一気に小梅の大川屋の寮へ。

裏へ廻って、隠し木戸の上を簡単に乗越したお静、それがお静に化けた銭形平次であることは言うまでもありません。物置へ行つて、戸を開けようとして驚きました。

「おや?」

閉っているはずの戸が開いて、中に居るはずのお品が見えなかったのです。

その時、どっと起つたのは、ガラツ八を見失つた女どもの声。お静に化けた平次は、あわてて物の蔭に身を潜めました。

「……………」

何やら、縁の下から首を出す者があります。

「八か」

「親分」

二人が互に見定めたのは、長い間に鍛錬された勘だったでしょう。

「叔母さんは？」

「助け出しましたよ、その駕籠の中で」

「そいつはいい塩あんべえ梅だ、——お品さんを見なかったか」

「いいえ」

「今晚を越すと危ない、どんな事をしても見付け出さなきや」と平次。

「もう一度入って見ましようか」

「いや、手前は叔母さんをつれて石原の兄哥あにきのところへ行ってくれ、それからまた引返すんだ——物置の後ろに隠し木戸がある、内からなら楽に開けられる」

「大丈夫ですか、親分」

「心配するな」

平次はそのまま家の中へスルリと飛込みました。

ガラツ八は平次に教わった木戸を見付けて、駕籠の中の叔母をつれ出しました。

が、その叔母を石原までつれて行くのに、ガラツ八はどんなに骨を折ったことでしょう。

一刻いっときもかかって、叔母を安全なところへ届けて、さて引返す段になると、利助の子分は

一人残らず出払って、八五郎に手を貸してくれる者もない有様だったのです。

八

平次は女姿のまま、暗い納戸に身を潜めました。家の中の騒ぎは容易に鎮まりそうもありませんが、半刻（一時間）ほど経つと、兩戸をバタバタと締めて、嚴重に戸締りをしてる様子です。

女どもは騒ぎ疲れて寝てしまいました。不思議なことに、これほどの騒ぎにも、男が一人も顔を見せないのは、一体どうしたことでしょう。

どこやらで釘くぎを打つ音が聞こえます。不吉な予感に、平次はハツと耳そぼだを聳てました、が、釘の音は右に聞えたり、左に聞えたり、前に聞えたり、後ろに聞えたりするので、それが棺の蓋を打ちつける音でないと解つて、何となくホツとした心持になります。

それから半刻ばかり、かなたこなたに残る有ありあけ明ひの灯をたよりに平次は一生懸命捜しました。が、不思議なことに、ここに隠されたはずのお品が、どこに居るか影も形も見えませんが、

「おや」

バチバチと物のはぜる音、物の焦げる匂いがツンと鼻をつきます。

平次はもう一度ギョツとしました。奥の方から眼やきがねに焼やきがね金を当てるような、大幅ほのおの焰ほのおが、カツと氾濫して来たのです。

「火事だツ」

平次は思わず唳どな鳴りました。かなたこなたに寝ていた下どもは平次の声と、焰ほうこの咆ほうこに驚いて、

「あッ、た、大変ッ、どうしよう」

あられもない姿の二十数人、悲鳴と共に殺到して来たのです。

平次もその人波に押されて、思わず表の方へ行くと、そっちからも一陣の焰、——いや、それだけではありません。後ろの方の羽目も、いつのまにやら真っ赤に焼かれて、猛火は三方から、二十幾人の女をあぶり立てるのでした。

「お品さんはどこだ、お品さんは？」

平次は手当り次第に女をつかまえて訊きましたが、驚きあわてているせいか、一人も満足な答をしてくれる者はありません。

その上、たった一方しか開いていない方へ雪崩なだれ打って行った女ども、一生懸命雨戸を開けようとはしますが、どうした事か右も左も、雨戸はちよつとも動かないのです。誰かが、外から雨戸を釘付けにして、三方から火を放ったのでしよう。

「己れッ」

平次は煙に巻かれながら齒噛みをしました。

「お品さん」

ただ一つの手段は、お品に返事をして貰うことでした。

「お品さん」

声を限りに呼びましたが、女どもの死物狂いの騒ぎに消されて、返事があつたところで聞えそうもありません。

「お品さん、——どこだい、お品さん」

一生懸命に澄ました平次の耳に、かすかに響くもの、その見当に飛んで行くと、極楽ごつこの看板にした大仏壇が一つ、その嚴重に鎖とぎした扉の中で、何やら物音がするようでもあります。

グイと扉を引開けると、石つころのように転げ出したのは雁字がんじがらめのお品。

「あ、お品さん」

「親分」

平次はお品を担いで女どものひしめく正面の雨戸へ——。

三方から迫る焰は、綿わたけむり煙つんざを劈ついて背を焦がすばかり。

「助けてエ——」

「ヒ——」

泣きわめく女どもをかきのけて、平次の鉄腕は雨戸を叩き破りました。

「叩き壊すのだ、——開けようと思つては駄目だッ」

号令が一つかかると、四十幾本の手は滅茶滅茶に雨戸を叩きます。そのうちに二三枚の戸は押し倒されまして、戸と共に欄干から落ちた二三人の女は、月の下の池の中に、水音高く沈んだ様子——。

「帯を解けッ、欄干からそれを手繰つて一人ずつ降りるんだ」

平次は必死と声を絞ります。が、それも無事に逃れる道ではなかつたのです。

「降りて来い、一人一人、膾なますにしてやる」

拔身を構えて、上をハタと睨にらんでいるのは、元町の医者、——愛嬌と世辞で評判になつている玄道の兇悪無慙むざんな顔ではありませんか。

「野郎ッ」

平次は懷をさぐりました。が、生憎あいにく財布もどこかへ振り落したらしく、一文の持合せもありません。投げ銭の手を封じられると、二階に居る平次には、下で拔身を構えた玄道に向う工夫はなかつたのです。

その間にも後ろからカツと迫る焰、二三人の女は、平次に教わつた欄干の帯を伝わつて下に降りましたが、大地に足が着く前に、玄道の刃やいばに切つて落されます。

女の悲鳴と焔の咆哮ほうこうと、血潮と、水と、火と。

「何という事をする」

平次は必死と智慧を絞りますが、一挙に二十幾人の命を救う工夫は浮びそうもなかったのです。

油と燃え草を用意した火攻めで、火の廻りの早いために土地の鳶とびの者も未だ来ません。いつそ、一と思いに飛降りて、一と太刀斬られながらも、女どもの命を助けようか——平次はついそんな事を考えて欄干に足をかけました。

「親分、飛降りちやいけねえ」

いつの間によつて来たか、ガラツ八の八五郎の声です。

「野郎ッ」

振り返つて斬下げる玄道の刃を潜ると、ガラツ八は後ろからむずと組付きました。名代の金剛力です。

「八、離すなッ」

「おッ」

揉み合う真ん中へ、平次は身軽に飛降りたことは言うまでもありません。

「御用ツ」

二人力を併せると、玄道の刀などは物の数でもありません。押えて縛る間に、二階の物品は自分の縄を解いて貰つて、焰に背を焦がされながらも、二十幾人の女を順々に下へ降ろしました。

*

「親分、祈祷所へ行きましようか」

「無駄かも知れないが、行つてみよう」

平次とガラツ八は、ちやうど駆け付けた利助の子分に縄付の玄道を任せて、元町の祈祷所に向いました。

表の戸は開け放つたまま、飛込んでみると――、

「あッ」

先達の九郎次と女房のお方は血の海の中にこと切れ、四人の少女は縛られたまま、虫のように顫ふるえていたのでした。

翌^{あく}る日玄道を責めて、何もかも明らかにしました。天靈様を担ぎ出して、一と儲けしようと考えたのは九郎次夫婦ですが、それに南蛮種の眠り薬を使わせ、極楽の歓楽を味わせて金を絞ることを考えたのは医者^の玄道だったのです。

このからくりを嗅ぎ出しそうなのがあると、持金を悉^{ことごと}くまき上げた上、人知れず殺して海に沈めましたが、ガラツ八と平次に本拠を襲われたことを覚ると、首魁^{しゅかい}の玄道は、九郎次夫婦と、蓄えた女どもを一挙に殺し、口を塞^{ふさ}いで高飛びしようとしたのです。

「親分が、女に化けたのは始めてだろう。こいつは江戸中の評判になるぜ」

面白がるガラツ八、それは、何もかも片付いたある日の事でした。

「馬鹿、黙っている。風邪が癒^{なお}つたと聞くと相手が用心するから、四五日我慢して寝ていたんだ。女房に化けるより外に術^てがあるものか」

「ヘエ、四五日寝ているのだけはあやかりたいくらいのものさ」

「馬鹿野郎、気をもみながら寝ているのも楽じゃねえぞ」

二人は声を合せて笑いました。

「ところで親分、あのお薦という娘が、あつしに逃げろと言ったのはどういうわけでしょう」

「お前めえに惚れたわけじゃねえ、岡っ引と聞いて、子供心に叔父夫婦のことが心配になったのさ、——どうかしたらお前が殺されちゃ可哀想だと思つたのかも知れないよ。あの娘は良い子だ、何とか身の立つようにしてやりたいものじゃないか」

「もう一つ、小判を沓くつぬぎ脱の下へ埋めたのは？」

「——ここ掘れワンワンか、——ハツハツハツ、お前が毎朝働き振りを見せて、庭を掃くのを知っていた人間の仕事さ」

平次はそう言つて笑うのです。

「ところで——八」

平次は思い出したようにガラッ八の肩を叩きました。

「何で、親分」

「笹野の旦那から聞いたが、今度の捕物は八五郎の手柄だから、お奉行からたんまり褒美が出るそうだよ」

「へエ」

「何に費つかうつもりだ」

「叔母へやりますよ、虎の子をなくしてしまつて、ひどくがっかりしているから」

ガラツ八はそんな事を言つて、快い心持そうにニヤニヤしました。

(原註) 昔イラン国で、Hashish (ハシシ) の製品を用い、旅人を眠らせて豪華な宮殿に伴い、極樂と称し、一夜の歡樂を尽させて布教した例があつた。一時甚しく勢力を張り、兇暴の行いがあつたと伝えられる。フランス語の Assassin (アサツサン——殺人者、暗殺者) は Hashish と語源を同じゆうする。平次時代の天靈様は蓋けだしその亜流でもあろうか。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（九）不死の靈薬」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第八巻」中央公論社

1939（昭和14）年6月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年5月号

入力：山口瑠美

校正：結城宏

2017年9月24日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

不死の靈薬

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>